

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	イオン・ドラグミス「サモトラキ」(四) 第八章
Author(s)	福田, 耕佑
Citation	プロピレア, 26 : 112 - 104
Issue Date	2020-12-30
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050191">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050191</a>
Right	Copyright (c) 2020 日本ギリシア語ギリシア文学会
Relation	



## イオン・ドラグミスー「サモトラキニ」(四)

福田 耕佑 訳

京都大学文学研究科博士課程後期  
アリストテリオ大学哲学部中世・近現代ギリシア学科

客員研究員

### 第八章・奴隷

今ではサモトラケ人たちの数は多くなく、三千五百人ぐ  
らいまでだろう。老人たちの記憶ではもっとたくさんいた  
のだが動乱期に多くの者が去り、十年前に黒死病が他の  
人々を刈り取って行った。その後の動乱でも島民たちはス  
キロスとイカリアの人々の略奪に悩まされた。サモトラケ  
人たちは海賊たちのお気に入りではあったが、島の人口を  
何年間も増やすことができないでいた。だが、この岩島に  
は数多を養うパンがなかったのだから、島民を増やすなど

は土台夢物語であったのだ。しかし土地を耕さずに放って  
おいて極貧状態に陥ってしまったのだからこれは怠惰さ  
も相まつてのことだ。現状、島の六百前後の世帯で二百人  
が農業に従事し、二百人が木炭を作り、二百人が山羊飼  
いをしていた。森を燃やして木炭を作れば作るほど、炭焼き  
職人たちはうんざりし始めその数も少なくなっていくた。  
燃やす木もはやなくなって、培った技術を捨て農民にな  
ってしまったのだ。漁師も炭焼き職人も両の手で数えられ  
るほどだ。皆いずれにせよ、冬にはいつも深い色で、夏に  
は時に白い布でできた、だぶだぶのズボンを履いている。  
とりわけ羊飼いたちは頭に赤い手拭いをしている。中には  
夏に麦わら帽をかぶっている者もいる。

彼らの歌が自分たちの全生涯を言い表している。ある場  
所の生を表すに歌以外の何があるというのだろうか？ 歌  
詞と音楽は切り離せないものなのだから常に一つである。  
時には舞踏もここに加わる。恋と結婚には歌がつきものだ。  
死には葬送歌——喜びと悲しみ——が伴う。生涯の重要な  
局面においてはこれにふさわしい歌が歌われるものだ。歌  
はこうして人生と一つになる。年頃の少女と青年たちの唯  
一の気晴らしとしてもこれが歌われる——舞踏だ。クレフ  
テス<sup>三</sup>が山に籠って今尚武装するのを想像し、人々が戦に

疲労困憊することもなかった場所で、あなたは戦の歌、  
匪賊歌クレフテイカを聞くことだろう。サモトラキの人々は善良であつて  
獐猛クレフテイカといった類の人種ではなかったので、クレフテスは  
匪賊などではなく盗人に身を窺してしまった。この島には  
山羊や羊を食う狼はいないのだが、羊飼いが妬みから他人  
の山羊と羊を屠畜して、これらの肉を売ってしまうことが  
できないように海か洞窟に投げ込むということがある。そ  
してこの相手も復讐のために、自分の群れを屠殺した男の  
山羊と羊をいくらか屠畜して犬や魚にやってしまう。だが  
彼らは面白がつて山羊を盗んでもいるのだ。これこそ島民  
たちの勇気試しなのだ。夫なんてのはかまととで機嫌を取  
つてやる価値もないと不平をならしていた母親も、少なく  
とも自分の子供にはこう誓いを立てていたものだ。

「嗚呼、いつになったら我が子が肩にヴーラ【Boûla】を  
担いでコナーキ【Kovaki】に職を得られるのを神様が見せ  
てくださるものだろうか」。ヴーラとは、サモトラキ人た  
ちが二本の腕で背に背負つて食物を入れていた、山羊の皮  
で出来た袋のことである。そしてコナーキとは、ミュディ  
ル四が住んでいた役場のことである。コナーキはホラ五に  
あるジェノヴァの半ば崩れかかった城壁の中にあつた。階  
段を上がつてビザンツの迫持アキのついた門から入っていく。

壁の右側には、ジェノヴァのエノス六の領主でパレオロゴ  
ス家の親類のパラメデ・ガツテイルジオ七という男がある  
時島を統治していて、この城塞の中にいたことを明らかに  
してくれる碑銘が書かれていた。当時サモトラケを訪れた  
あるイタリア人が、彼がどれほど勇敢であつたかを物語つ  
ている。

サモトラケ人たちにはトルコ人との戦いを歌うクレフ  
テスの歌はなかった。このようなものを歌つたものは贋作  
であろう。トルコ人に言及する唯一のものに、葬送歌のよ  
うな歌で、次のように破滅の日を嘆いたものがある。

今日は水曜、受難の初日。

トルコ人が私たちを犬のごとく殺す。

頭を取つて体は残し、

通りも、小さな道に至るまで全てをいっばいにした。

他にも婚礼歌があり、栄光の隷従を歌い上げる。まず島  
のアガ八が伝統に従つて、新郎が初婚の寝台で彼女を知る  
前に、全ての新婚の女たちと共に臥していた。

おい、美女がやってきた。この美人が降りてくる。

そして金貨や真珠で見えなくなっちまう。

マルタの矢のように、武装した雌獅子のように。

五人のパンシャが、十人のイエニチェリが

彼女を捕まえにかかる。

そしてこのイエニチェリの長が彼女の腕を取る。

不運なサモトラケ人たちは未だ隷従を甘受して忍従し、ただ歌と、トルコ人たちには隠された言葉で気を晴らしていた。というのは、トルコ人たちの間で外国人の誰も彼らの証言を聞いても理解することなく通り過ぎて行くように、このような歌と言葉で語るのだ。麦わら帽子を被った島民が一人私に地元の話を物語ってくれた。曰く、トドロス司祭とかいう人物が食事をしようとアガと一緒に食卓に着いていたのだが、このアガが祝詞をもらって祝福を受けようとしてこの司祭を呼んだのだそうだ。そして司祭は「飲物と食物を」祝福した後で、アガに思いを巡らし続けて「邑はあれすたりて住むものなく家に人なし」<sup>九</sup>と言った。もちろんこれらの言葉を言いながらもトドロス司祭の隠れた喜びはあまりに大きく、次いで他の島民も、私に話をしてきているこの男が喜びに満ち溢れていたように、喜んでいたことであろうが、アガが決して意味を悟っ

たりしないようにとこの時間にどれほど震え上がっていたことであろうか！ ヨルギス司祭という他の司祭も、あるアガの子羊のために祝祷をしたそうだ。山羊泥棒のサモトラケ人がアガの子羊を盗んだことがあった。そこから中探しまわっても見つけれなかったもので、このトルコ人は怒って司祭の元に行き、子羊を盗んだ男を破門するように命じた。それでヨルギス司祭は主日教会で福音書朗読の後に「アガの子羊を食べた者がいるのであれば、骨一つ残らないだろう」と言った。事実骨一つ残っていないが、これはヤギ泥棒の骨ではなく、アガの子羊の骨で実現してしまったのだ。

このサモトラケ人は私に島民たちに使い古された警句を話してくれた。曰く、「私はあの七百人の中から出た者ではない」や「彼はあの七百人の中から出た者だ」というものだが、これらは「俺を笑いものにしようたってそうはいかない」や「彼はすぐに笑いものになる」という意味である。このの七百人というのはトルコ人たちによって一八二一年にエフカスで虐殺された者たちのことである<sup>十</sup>。だが、サモトラケ人たちが当時笑いものにはならずトルコ人たちの元に降伏に行かなかったにせよ、彼らが他の人々より優れていたかというところではなからう。狡知も良しと

はいえ、人間性はより大切なものだ。

サモトラケ人が私に語る言葉は全て奴隷にされ何をも成し遂げていない人間の言葉であり芝居であった。人は奴隷にされた時に物事に対する如才のなさを研ぎ澄ませるものだが、狡猾さの近くにおいて高邁さが研ぎ澄まされることはないのだ。

サモトラケ人たちは、アガが初めに自分たちの妻に近づくのを受け入れ、反乱することもなく自分たちが子羊のように殺戮されるのも甘受しているのだが、このサモトラケ人たちは今や自分たちの島にアルメニア人の偽の藪医者を迎え入れていた。というのも彼は常にトルコ人たちがうまくやっついていて、島民たちが何をやって何を言ったのかを証言し、ちゃんと税を納めたりちよるまかしたり、毎日島民たちを中傷して侮辱したりしているからだ。また島民たちは、利子なしで金を貸してくれ、島のプロエストスたち<sup>十一</sup>を繋ぎ止めていたという他の理由で彼を受け入れてもいた。彼らは、 Chorlughachy<sup>十二</sup>がまずサモトラケにこのアルメニア人を、仕事を手伝わせようと思って連れてきて、彼らがこのアルメニア人が顧客を見つけるのを手伝ってやり、彼の方でも見せかけは分け前を分配して、それから飲み屋で一緒にちびちびと飲んでカードをやっ

晴らしをしていたのだと確かに言っている。高利貸し、医者、盗み聞きをする者、間者、大酒呑み、カード賭博者で女たらし。この芸達者なアルメニア人は見せかけは人を治療してやって身ぐるみをはがし、色々な家庭を養ってやって名望を得て、 Chorlughachy<sup>十三</sup>たちがするように木炭を売買し、まさに Chorlughachy<sup>十四</sup>たちが木炭の目方を担いだ不運な人々をあざ笑っているのと同じように、この商売で炭焼き職人たちをも売買している。ギリシヤ人【Ρομιοί】の医師が最近島に移住して来て、アルメニア人のよりも廉価な薬を処方した。だが島民たちは、彼らを魅了していたアルメニア人の偽医者を追い出すこともはしなかった。ある日、十人ぐらいが居酒屋に集まっていたのだが、私は次の一言を彼らに言った。

「お前たち三千五百人の男たちが、あの偽医者 of 糞野郎に蹴りを食らわして追い出しもしないとは何たる恥か！ 三千五百人に少しでも心があるのなら、あいつに蹴りを食らわすのに何本の脚が必要だか分かるか？」彼らにはこれらの心が響いたようだ。ある老人がこう言った。

「我々を侮辱し打ち付け、汚物を浴びせて毒を盛り、こいつにパンを与えるために、自分たちの子供たちの口からパンを取り上げているような男が連れてこられてから幾年

が過ぎ去ったことか！　だが奴はこれで満足しはしない。他の奴らなら特に満腹しておるほどじゃ！」私は彼にどういふ人々のことを言っていたのか尋ねた。彼は他の全ての村民たちと同じように用心深く話してはくれなかった。教師が島の上の人々、プロエストスたちのことを言っていたのだと私に耳打ちしてくれた。

島民たちの不運が利害競争を増やし、トルコ人の影さえをも恐れ奴隷となっていた Cholbajutach は、自分たちよりもさらに奴隷にされた抑圧すべき人々を見出したのだった。民衆は三、四人のプロエストスたちの前では何の価値もない存在であった。貧しい炭焼き職人たちがこう言うのを誰でも耳にしたことがあるだろう。「俺たちは丸ごと奴に食われてしまった。俺たちは奴のために働く目になつてしまったが、奴は満腹せず腹を空かせたままだ。俺たちは大麦パンも食えず、俺らは雀り取られちまったんだ……」。地元の名士たちは高利貸しでまた商いにも携わつており、島から木炭を輸出して砂糖と珈琲、そして他の物品を輸入して、やりたいように島の市場を取り仕切っている。目方で炭焼き職人たちを、日給で労働者たちを、商品の値段で島民の皆をあざ笑つて、彼らは自分たちの元に役人を皆集め、徴税人であり監査官で長老でもあるのだから、機

会を見て地元の帳簿から甘い汁を吸っている。民衆を圧制していた彼らデレベイたち<sup>十三</sup>はただトルコ人たちとだけの良い暮らしをしようと思つていたのだ。だが彼らは、島に家を有している唯一のトルコ人のアリーの使用者で、船の所有者で盗み聞きの常習犯であり、新しい情報を入れてミューデルにこれらを知らせるために島から本土まで郵便をやっていた、アルメニア人藪医者<sup>十四</sup>の奴隷に過ぎないのだ。この恐ろしい暴君たちの一人は、アリーがギリシアから来たギリシア人に挨拶をして、自分のことを誤解しやしまいかと恐れていた。別の一人も恥ずかしさはあつたが彼を食事に家に呼んだが、恥をかくことのないようにとアリーも呼ぼうと考へた。もちろん、彼は島の正式な郵便配達員の一人であつたので、この幸運な男も Cholbajutach の家で食事する権利を有していたが、どうしてこのギリシアから来たギリシア人はギリシアの島にあつて、正式な監査官であつたにせよ島に一人しか住んでいないトルコ人とパンを共に食べねばならなかつたというのか？

島には主人として他に主教がいた。だが彼はサモトラケではなくギュミュルジネ<sup>十四</sup>に住んでいて、時には豊かな島で多くの物品を与えてくれるタソス島に住んだ。主教はサモトラケに年に一度やつてきて、定まった物を集めるた



めに二週間滞在する。島民たちが彼に支払いを済ませた後で、彼は満足して立ち去り、もう島で何が起るのかを問おうともしない。大主教の代表はこの島の司祭たちの内の一人のサモトラケ人で、素朴な人物である。彼は自分の信徒たちをどこに導き教えていくべきかを知っているのだろうか？ 勿論島民たちは司祭たちをそれぞれ尊敬しているように彼のことを尊敬しているが、彼に挨拶するか、その手に接吻した後では自分の仕事に戻ってもう彼のことは歯牙にもかけない。

島民たちの忍耐力と無関心は相当なもので、ブルガリア人の安手毛織物商が行ったり来たりするのを認めた後で、他の外国人が彼らの島に住まうがままにさせていたほどだった。修道院付き荘園の修道院長が、かつて修道院の畑を刈り取らせるためにブルガリア人の収穫人たちを連れてきたことがあった。自分の家を十分に守り切る術も知らないのに、どうして自分自身が破滅しないなどということがあるのか？ 島を取り巻く海も、名士や民衆、そして島民たちがこれにふさわしくなければ、外国人たちが足を踏み入れるのを妨げることはできないのだ。

主教といふべきか、 Cholbajju というべきか、名士たちの私利私欲はかくも大きく、民衆の奴隷根性もかくもはな

はだしいのだから、もはや私たちも自分たちだけで自分を統治することができなくなってしまふことだろう。ミュデイルと港の長、そして五人の村の見張りに満足することのない島民たちは、ただ将校だけが嫉妬と窃盗から彼らを救ってくれるだろうと思っていたので、政府に将校をも要求していた。トルコ人の将校とサモトラケ人たちは今や悪魔を引き込んでいて、自分の労苦を忘れてしまおうと思っても何をしていいのかわからず、自分の髪の毛をむしっていた。だが少し経てば将校から解放してもらおうために自分たちの島にスルタンをも呼んでしまうことだろう！ とはいえ誰に彼らを教え諭すことができるだろうか？ 司祭は定められたものを集めるために必要に応じて軍隊の暴力を使ってよいという命令をルメリから伝えに来、 Cholbajju たちは自分たちの利益のためにアルメニア人やブルガリア人を島に連れてくるだけでなく、悪魔をもその動向人にしうるといふのだろうか？ 教師には何も望みようがない。言語というのは各々の教授の**道具**に過ぎないにも関わらず、ある民族全体の教師たちが言語そのものをその教授の**目的**とする時、また多くの**知識**を伝達しさえすればよいと思つて、このことを教育と呼んでいるとすれば——この民族の教師たちは失敗しているのだ。そしてサモ

トラケの教師はぼろぼろな家で捨て子にされた島の少女たちを様々な子守唄や本、そして自分の覚えていた御話で寝かしつけるのだ。私はこの悲惨な少女たちに目を向けた。彼女たちの目は私を見て輝き、指導者に命令を求めているかのように、何か新しい物に飢え乾いていた。

ギリシア人たち【Pouloi】が自分たちの間で独力で仕事の手はずを整えるほど、トルコ人は内側に入ってきて来ることをできなくなる。自己統治ができなくなるとすぐに、自分たちのギリシア的な実体【υπόστασις】を失ってしまうことだろう。自己統治ができなくなればなるほど、トルコ人、或いは自分たちの生涯に介入してきて自分たちを統治しようとする他の者により多くの口実を与えることになるのだ。

私は海の上の小高い岩の上で或るカーヤー<sup>十五</sup>と面と向かって座り、彼の話を耳を傾けた。あるチャヴシュ<sup>十六</sup>がな、カーヤーをぶちくわしたことがあったんだが、この男の主人が助けに来てくれるだろうと樂觀して、トルコ人はこの男を殴らせるがままにしたなんてことがあったんだ。だがな、彼の主人がやって来ることはなく、この男がどこに手を挙げたか分かるか！カーヤーは希望を持ち続けて無慈悲に棒を食らい続けていた。ついにチャヴシュ

は彼を半殺しにしてしまった。

この話を聞いて、総主教や統治者たちと一緒にいて、毎日毎時間ビンタを喰らって黙ったまま腕を上げることもせず、むしろ偉大な人々がやって来て自分たちを解放してくれると期待しているような民族に対し、どのように、そしてなぜ自分が思いをめぐらしているのか分からなかった。トルコ人がギリシアにやって来て、ギリシアを打ち付け始めた。ギリシアは、反抗して打ち返す代わりに後ろを向いて、いつ自分たちの主人が——或いは列強諸国が——自分たちを救い出しに来てくれるのかと遠くを見ていた。だがギリシアの主人たちがやって来ることはなく、ギリシアは希望を持ちつつも不運な状態にとどまり、トルコ人がますますギリシアを打ち付けるのだった。背骨に刃が達し、ギリシア国家がトルコ人によって全くの破滅への道を歩み始めた時、社稷の主人たちが間一髪トルコ人を阻んで、おお、汝、奴隸たるギリシアよ、汝が自由に生きて軛から解き放たれるように救い出したのだ。そうだ、救い出されたのだ。おお、不運な民衆よ(Aege)、おお、偽りの王国よ、おお、ラーヤ<sup>十七</sup>の宰相よ、おお、取るに足らない首領よ。諸君は救い出され、そうして手足を縛られることになつたのだ。



奴隸とは、**独力**で解放を手にし得たのではない限り、常に何かの主人の奴隸であり続けるものだ。成し得なかったとすれば、失墜の最下層に落ちていくまで、誰かの奴隸から奴隸へと移っていくだけなのだ。これこそ奴隸の人生。死んでしまった方がましだ。

だがこの地の上にこれからも奴隸と自由人が存在することだろう。

- 一 *των Αραγούμης* (一八七八—一九二〇)：外交官、政治家、ギリシアの民族主義的作家。父親は首相経験のあるステファノス・ドラグミス。バレスやニーチェの思想に影響を受ける。著作に『ギリシア文化』、『私のヘレニズムとギリシア』。
- 二 底本に *Αραγούμης των* (1994b), *Συνοβόκη, Το νησί, Εκδόσεις ΒΑΣ. ΠΗΓΟΠΟΥΛΟΥ, Θεσσαλονίκη*. を使用している。
- 三 *κλέφτες*: *κλέφτης* の複数形。山賊や匪賊の意であり、ギリシア独立戦争時にはその多くが何らかの形でこれに寄与した。
- 四 原文で *μουτίρης*。トルコ語で *müdür* 或いは *müdür*。主に地方行政官の意。
- 五 *Χώρα*: 『サモトラケ』第三章「ホラ」参照。参考 URL: [https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/4/46851/20190122135616101863/Propylaia\\_24\\_111.pdf](https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/files/public/4/46851/20190122135616101863/Propylaia_24_111.pdf) (二〇二〇年七月四日最終閲覧)
- 六 *Αίνας*: 現トルコ共和国領のエネズ (*Enez*)。
- 七 *Παλαμήδης Γαρελούζος* (一三三八頃—一四五五)：ギリシア語風にはパラミデイス・ガテルズスだが、一般にパラメデ・ガッティルジオ (*Palamede Gattilusio*) の名で知られる。マヌエル二世パレオロゴスの甥であり、一四〇九年からその死までトラキアのエノスの領主であった。
- 八 *Αγάς*: トルコ語で *aga*。地主ほどの意味。

- 九 イザヤ書六章十一節より。尚訳文は文語訳聖書を参照にした。
- 十 一八二二年九月一日に発生したオスマン側によるサモトラケ島で起こった虐殺に由来する。ここでのホラの城塞の中のエフカス [*Εφκας*] という地名も七百 [*ετρακόσια*] に由来する。
- 十一 *Προστοί*: また *Κοτταμάτσηδες* とも書かれる。トルコ語で *Kocabaşlar*。オスマン統治期のバルカン地域におけるキリスト教徒の地主の一種を指す。
- 十二 *Τσομπατζήδες*: *Τσομπατζής* の複数形。トルコ語で *gorbaci*。イェニチェリ軍における階位の一つ。
- 十三 *Ντεπευρήνης*: *Ντεπευρήνης* の単数形。トルコ語で *Derebey* など。アーヤーンとも呼ばれるが、オスマン帝国において十八世紀以降の一定の勢力を有した地方の名士、名望家を指す。
- 十四 *Γουμουλτζίνα*: 現在のギリシア共和国のコモテイニ (*Κομοτηνή*)。オスマン時代にはギュムルジネ (*Gümürlüce*) と呼ばれるようになり、現在でもトルコ語でそう呼ばれている。
- 十五 *Κεχαγιά*: トルコ語で *kahya*。高官や幹部の意味。
- 十六 *Τσαούνης*: トルコ語で *çavuş*。使者の役割を持った兵士を指す。
- 十七 *παγιάς*: オスマン語で *paçia*、トルコ語で *paçya*。原義は家畜の意。オスマン帝国臣民でムスリムではないキリスト教徒等を指した。